

巻頭言

日本古典文学の研究環境は、いま大きな転換期を迎えています。古典籍の高精細画像や翻刻テキストが次々と公開され、かつては限られた専門家のみが利用できた資料が、研究者・学生はもとより、広く一般の人々にも開かれるようになりました。デジタル技術、とりわけ近年急速に発展する人工知能（AI）は、古典文学への「入口」を広げただけでなく、従来は問い得なかった課題への挑戦を可能にし、研究のあり方そのものを変えつつあります。

「日本古典文学 DH シリーズ」は、こうした時代の要請に応えるべく企画された全三巻の叢書です。第一巻では『源氏物語』を、第二巻では古典籍を、第三巻では和歌を主題とし、デジタル・ヒューマニティーズ（DH）の視点から日本古典文学研究の現在と未来を多角的に展望します。

本シリーズでは、TEI、IIIF、くずし字 OCR、自然言語処理、画像分析、AI といった技術や手法を紹介するだけでなく、それらが古典文学研究にどのような新たな知見をもたらすのかを、具体的な実践事例と研究成果を通して示すことを目指しています。デジタル技術はもはや研究の補助的手段にとどまらず、対象をとらえ直し、新たな問いを生み出すための原動力となりつつあります。その可能性と課題の双方を見据えながら、第一線で活躍する研究者たちがそれぞれの立場から論じています。

監修にあたり私たちが大切にしたのは、デジタルと古典の融合を単なる技術論として語るのではなく、古典文学そのものへの深い関心と愛着を出発点とすることでした。専門的な内容についても可能な限り平易な説明を心がけ、日本古典文学の研究者や学生だけでなく、教育・図書館・博物館などの現場に携わる方々にも広く手に取っていただけるよう努めています。

本シリーズが、デジタル技術の拓く新たな古典研究の可能性を示すとともに、日本古典文学の豊かな魅力を再発見する契機となれば、監修者としてこれに勝る喜びはありません。

監修

海野圭介（早稲田大学教授）

加藤弓枝（名古屋大学准教授）

目次

序言 本書の構成と各論紹介 [舟見一哉]	1
----------------------------	---

第Ⅰ部 デジタル源氏物語

「デジタル源氏物語」の構築と展開 [田村隆]	9
------------------------------	---

●COLUMN

古文も現代語訳も！

—— 画像とテキストを一緒にみる —— [小川夏代子・福嶋彩乃]	26
--	----

〔技術ポイント〕 画像とテキストをつなぐデータ構築の舞台裏 [中村覚]	29
---	----

ページの類似度で探す新発想

—— AI 画像検索版 —— [木越みち・鈴置怜子]	33
----------------------------------	----

〔技術ポイント〕 AI 画像検索 —— 自動化で広がる諸本比較 [中村覚]	36
---	----

本文だけじゃない、絵にも注目！

—— 挿絵画像の比較 —— [中村美里]	39
----------------------------	----

〔技術ポイント〕 挿絵を並べる・重ねる技術 [中村覚]	41
-----------------------------------	----

ちょっとのぞいてみませんか

—— 動画・リーフレット・SNS —— [石黒敦子]	43
----------------------------------	----

●座談会

図書館員が語る デジタル源氏物語の来し方・行く末	47
--------------------------------	----

第Ⅱ部 源氏物語と新たなデジタル技術

『源氏物語』を「ふみのはぜみ」で読み、学び、教え、研究する ——大正大学附属図書館蔵『源氏物語』桐壺巻の読解を中心に—— [古田正幸] …	61
--	----

● COLUMN

『源氏物語』から紡ぐ「くずし字 AI-OCR」と 「読む」ことの未来 [福井尚子]	77
AI の力で「埋もれた和歌的表現」を見つけたい ——平安和文における表現のデジタル的検出—— [中西智子]	87
TEI ガイドラインに基づいて『源氏物語』の登場人物をマークアップする ——古典文学研究者が担う役割を中心に—— [舟見一哉]	107
源氏物語享受作品の TEI (Text Encoding Initiative) 適用の試み ——『山路の露』を例に—— [横山恵理]	139
『校異源氏物語』の本格的なデータ化への期待 [永崎研宣]	163
AI と VR を活用した源氏絵研究 ——暗黙知と価値創造が繋ぐ文理融合の世界—— [小長谷明彦・稲本万里子] …	189
生成 AI で源氏物語を語る ——インタラクティブポッドキャストの開発と検証—— [矢野浩二郎] …	207
編集後記	229
執筆者紹介	231

序言 本書の構成と各論紹介

舟 見 一 哉

はじめに

ここに「日本古典文学 DH シリーズ」の第一巻として、『源氏物語』を対象とした論文集をお届けする。巻頭言に明示されているように、本論集は「デジタルと古典の融合を単なる技術論として語るのではなく、古典文学そのものへの深い関心と愛着を出発点とすること」を基本理念としている。近年のデジタル技術の革新に伴い、研究環境は劇的な変化を遂げた。本書はその最前線を踏まえ、日本古典文学研究の現在地と未来の展望を示すものである。『源氏物語』はその成立から現在に至るまで極めて多くの読者に愛され続けている古典作品であり、時代や地域、文化の境界を超える、古典のなかの古典といってよい。この『源氏物語』の読解や研究、あるいは新たな領域への拡張にデジタル技術がどう関わっているかを示すことは、デジタル・ヒューマニティーズ (DH) と日本古典文学の「いま」の関係性を最も顕著に描き出すものと考え、第一巻のテーマとして選定した。

執筆者各位には、それぞれの関心に従って、〈『源氏物語』×デジタル技術〉という敢えて緩やかなテーマのもと、論を寄せて頂いた。そのため、デジタル技術や知識の体系的な教書として本書は組み立てられてはいない。しかし、充実した各論文を通読することで、技術革新のただ中において日本古典文学研究がいまどこに立ち、どこへ向かおうとしているのかが鮮明に浮かび上がる構成となっている。読者の皆様には、まずはご自身の興味を惹く論文から目を通し、最終的には本書全体へと読み進めていただくことを願っている。なお、専門用語については各論中で平易に解説されているため、提示された参考文献とあわせて学びを深めていただければ幸いである。

本書は2部構成となっている。各論の位置付けを、読書案内をかねて（編者の主観的な感想を交えつつ）ここに説明しておきたい。以下、敬称を略す。

1. 第Ⅰ部 「デジタル源氏物語」をめぐる諸論

第Ⅰ部は、いま最も注目されている大型プラットフォーム「デジタル源氏物語」(<https://genji.lib.u-tokyo.ac.jp/>)をめぐる諸論である。本作はデジタルアーカイブジャパン・アワード2025を受賞し、DH Awards 2025にもノミネートされるなど、〈『源氏物語』×デジタル技術〉の最前線を示す存在である。田村論文は、「本を何冊も広げられる大きな机」としてのデジタル校本、AI画像検索、挿絵・図像比較を事例に、当該プラットフォームを支える理念を紹介する。AI画像検索における人間とAIの新たな協働は、精度を求める従来型のプロセスとは異なる点、特に興味深い。日頃からその恩恵に預かりつつも、私たちは構築の背景にある理念を見落としがちであるので、田村論文を熟読しよう。また、紙媒体や旧来のデータのまま取り残された資料群の救済という、私たち自身が取り組むべき課題も必読である。続くコラムでは、「デジタル源氏物語」を構築した「裏源氏勉強会」のメンバー（小川・福嶋・木越・鈴置・中村美里・石黒）が、具体的な機能を分かりやすく解説している。デジタル技術に苦手意識がある方は、ぜひこのコラムから読み進めてみてほしい。サイト内の動画や記事とあわせて参照すれば、操作への不安は解消されるはずである。そして技術面の解説記事「技術ポイント」（中村覚）で紹介される知見やアドバイスは、これからデジタル技術を活用しようと思っている読者にとって極めて有益であり、他作品の研究にも応用したくなる技術やアイデアの宝庫となっている。デジタル技術に馴染みのある方は、まずはこちらを読んでみてほしい。最後に収録した同メンバーによる座談会では、打ち解けた対話の奥に、日本古典文学とデジタルとの理想的な融合の姿が浮かび上がる。かつ、文学・図書館学・人文情報学が手を取り合う教職協働の最良のモデルケースでもあり、図書館におけるスペシャリストの重要性を改めて痛感する。ぜひ、実際に「デジタル源氏物語」のサイトにアクセスしながら、この第Ⅰ部は読み進めていただきたい。

2. 第Ⅱ部 源氏物語と新たなデジタル技術

第Ⅱ部では「源氏物語と新たなデジタル技術」と題し、多様なアプローチから『源氏物語』の具体像に迫る論文を集積した。以下、テーマごとに紹介する。

2.1 くずし字 AI-OCR の実践と展望

まず、OCR 技術に関するものとして、TOPPAN 社の開発にかかる、AI を使用してくずし字を読む OCR (くずし字 AI-OCR) の「ふみのはゼミ」を取り上げた 2 篇。古田論文は、「ふみのはゼミ」と「ふみのはビューワ」を用いた『源氏物語』の翻刻指導および研究の報告。学生との協働による翻刻から Web 展示への展開、さらに大正大学蔵本『源氏物語』の本文系統を考察するに至るまでの実践とデジタル技術の有用性を示す。初学者が楽しみながら翻刻に取り組める環境を整え、Web ビューワでの公開や展示といった明確な成果へと繋げる、大学教育の優れた実践例である。福井コラムは、『源氏物語』版本の手作業データ作成から始まった「くずし字 AI-OCR」の開発史と技術の進化をたどり、実務や教育現場での多角的な役割を述べる。古典文学を読むうえで必須のスキルであるくずし字の読解能力を習得するためには、訓練に一定の時間を要するが、くずし字 AI-OCR によってそのハードルは低くなってきた。この点については批判的意見もときに聞かれることがあるが、この 2 篇によって、そういった不審点や疑問点は新たな期待へと変化しよう。福井コラムの指摘するように、AI は文字同定のアシストツールであり、人間が文脈や背景を読み解く「精読・思索」の時間と潜在能力を引き出す有益な道具である。なお、深層学習を用いたくずし字の認識については、後述する小長谷・稲本論文でも論じられているので合わせてお読みいただきたい。

2.2 表現の解析と構造化テキスト

つぎに、『源氏物語』の表現や読解に関する 4 篇。中西論文は、地の中に改行されず溶け込んだ「埋もれた和歌的表現 (和歌未満のリズムや語彙)」を研究者の手作業のみで発見することの難しさを指摘し、AI を用いて「音数律」「歌語密度」「諸本異同」を数値化・可視化することで候補を効率的に抽出する手法を提案す

る。AIを探知ツールとして活用し、最終的な文脈解読を人間が担うことで、古典文学の新たな「読み」を開く可能性を示した論文。『源氏物語』の読解に精通した研究者ならではの指摘であり、極めて重要な課題を呈示している。『源氏物語』の本文をデジタル情報として公開することは、伊井春樹編『CD-ROM 角川古典大観源氏物語』（角川書店、1990）などによって早くから試みられてきたが、文字列を超える検索という点には課題を残していた。これを解決するデジタル技術の開発と公開は、「デジタル源氏物語」との協同あるいはまた別のデータ構築など、いま最も求められるものであろう。舟見論文は、「デジタル源氏物語」における本文データのように、Text Encoding Initiative (TEI) ガイドラインに準拠する構造化されたテキストデータに対して、物語の展開によって変化する呼称の情報を付与する方針案を提示する。そして、その実現には源氏研究者の参画が必須である理由を、源氏研究者に対して説明する。以上の2篇は、デジタル技術の援用には慎重であるべきだという立場の方にこそ、響くはずである。横山論文は、『源氏物語』の続編である『山路の露』を対象とし、精読による分析結果をTEIによって構造化することで、従来から指摘されている典拠・受容関係を、より多層的な構造として描き出す試みである。すなわち、両作品における人物・表現・場面・空間といった各要素が、〈継承〉〈変形〉〈対応表現〉などの複数のレベルで重なりあう構造的関係にあることをマークアップにより明示化する。こうして研究者の精読プロセスを外在化し、第三者の再検証や新たな解釈（再読解）へと拓く手法は、紙媒体の限界を超える新たな「研究の循環モデル」を提示するものといえよう。永崎論文は、TEIによるテキスト構造化の考え方を概観したうえで、校訂テキストをTEIで記述することの意義を論じ、『校異源氏物語』を事例として検討する。TEI研究を牽引する同氏の解説は、初学者にとって最適なガイドである。TEIでは、本文・異文・それを伝える伝本の間関係を保ったまま記述し、表示とは分けて設計できる。かつ、TEIにより、校訂テキストは書籍版のような固定的な「版」から、検索・比較・再利用に開かれた「研究データ」へと性格を変え、青表紙本・河内本・別本という従来の分類も一つの研究成果として保持しながら、根拠となる個々の異文の水準から検討し直すことが可能になる。『源氏物語』における本文異同に関心を持つ方に、ぜひとも最初に読んでいただきたい論文である。

3. 『源氏物語』の「拡張」

最後に、『源氏物語』を拡張する論文2篇を集めた。小長谷・稲本論文は、深層学習やVR・2D技術を源氏絵の流派推定および源氏物語図屏風の再現展示に応用した文理融合の取り組みを取り上げ、その学術的・実践的価値について考察を展開している。各節における個別の研究成果もさることながら、AIやVRが提示する「形式知」や技術そのもの以上に、研究者の解釈や鑑賞者の体験といった「人間の暗黙知」とAIとを相互に循環・協働させること（知識スパイラル）こそが、文理融合研究における新たな知と価値を創出するという本論文の指摘は、本書の各論を貫く最重要テーマとして位置づけられる。矢野論文は、古典文学「源氏物語」への理解を深めるため、生成AIを活用して開発された教養番組風システム「インタラクティブポッドキャスト版 おしゃべり源氏物語」の開発と検証について報告する。AIのホストと専門家アバターが対話で解説する「番組の受動的視聴」をベースにしたシステムは、予備知識が少ないユーザーが『源氏物語』に触れるハードルを一気に下げてくれるだろう。いくら『源氏物語』といえども、読まれなくなる／読めなくなった／興味を持たれなくなった時点で、変化は止まり、平安時代から継承されてきた歴史はそこで途絶えてしまう。極めて訴求力の高い当該システムは、『源氏物語』を次世代へと引き継ぐための理想的なひとつの形であると感じる。

おわりに——専門知とデジタル技術の架け橋として

以上、編者としての所感を交えながら各論文を紹介した。全篇を読んで興味深く思われたのは、『源氏物語』と関わるデジタル技術の開発や利用を進める際、技術的問題の前に、『源氏物語』への深い理解が必要であるという認識が各論で共通していることである。『源氏物語』を読み、愛し、そして研究する人々の参加が求められているのである。デジタル技術という言葉を見ると、いま流行のあの話かと閉塞感をおぼえ、ともすると批判的側面を述べたくなるけれども、そういったやや心理的な反発は、重大な損失に繋がりがねないことが各論を読むとよくわかる。陳腐な言い方かもしれないが、デジタル技術は人文学研究を代替する

序言

ものではなく、その可能性を拡張するための手段である。AIなどに代表されるデジタル技術による処理および分析は、研究者の専門的知見による解釈・再検証・批正を通じて、初めてその価値が実現される。専門知に裏打ちされた研究による支えがなければ、技術の進展も真に有意義なものとはならない。小長谷・稲本論文が述べるように、AIが推論・出力できるものは過去のデータに基づく「形式知」の集積であるから、それらを活用して新たな知見や価値を創出するためには、「人間の暗黙知」が今後一層重要になる。人文学的専門知がデジタル技術をうまく活用し、両者が有機的に融合することで、日本古典文学研究の未来は拓けるのである。

本書を手にとってくれた皆様は、きっと『源氏物語』を深く愛しておられることと思う。本書に示された〈『源氏物語』×デジタル技術〉の諸相について、ご自身の専門知と結びつけながら味読していただければ幸いである。